

審査にあたりて

審査にあたり感じたことは、技術的に相当高いレベルのところまできているということだった。

芸術ではよく「個性」が云々され問題とされている。ご存知の如く、書の場合は他の芸術分野と異なり、個性はなかなか出にくい面がある。白と黒の単純な世界で、わづかに印泥の赤色が興を添えているにすぎない。

この地味で質樸な書は、ながい年月の努力研磨が要求される。人間の熟成を待つてようやく個性の花がほのかに漂ってくるような気がする。作品にほのぼのと人間性がにじみ出てくる書は齢六十過ぎて七十を数えるころだという。

ある程度高度な技術面の練磨の功がなればつぎは、人間形成のうえで再び初心に、かえって「書とは何か」胸に手をあててじっくりと掘り下げてみようではないか。「本当によい書」を書くために。

村上 皓 南

第13回

書の部入賞者

賞 名	題 名	氏 名	住 所
いわき市長賞	孟浩然詩	吉田汀秀	
いわき市議会議長賞	袁宏道詩	松崎秋香	
いわき市教育委員会 教育長賞	柳湖來農夫	神林東伸	
(佳 作)			
魁文堂賞	七言律詩	滝翠嶺	
"	黄山谷詩	芳賀二葉	
福島県報徳社賞	黃庭堅詩	長谷川素碩	
"	文賦	田久芳涯	
"	以和為貴	渡辺大雅	
遠藤一心堂賞	顧炎武詩	服部桂山	
"	七言絶句	伊藤抱琴	
"	夕立	細井研堂	
"	吳昌碩詩	斉藤小波	
"	張季鷹詩	川嶋石楠	
いわき商工会議所賞	獨露	春日八虎	
いわき市文化団体 連絡協議会会長賞	五言絶句	鷺谷青隲	
株式会社加地和組賞	魏蘭座右銘一節	永山閑遠	
株式会社すまい賞	吳昌碩詩	生田小卷	
有限会社トーカイ賞	伊予切和漢朗詠集	平島松琴	
株式会社箱崎美術 広告社賞	閃電猶遲	門馬春錦	
いわきライブ クラブ賞	白楽天詩	関根溪石	
いわき市民美術 展覧会運営委員会賞	胡鼻山	小口天信	
"	金泥写經	蛭田秋月	
"	蘭亭之詩	中村静雅	
"	宋司馬温公独樂園記	石川幸堂	
"	七言二句	山縣一竹	
"	牧水の歌	助川空翠	
"	七言句	佐川晚水	
"	唐詩	小宮唐遷	
いわき市書道協会賞	七言絶句	河辺素月	
"	王漁洋詩	山田鐵石	
"	王维詩	新妻涉園	

審査を終えて

「書」、よく人に聞かれます。

書と言っても中国で四千年、日本でも一千三百年の歴史と伝統とをになって現代に伝えられており、実用の文字から装飾的効果と同時に、芸術的な配慮の流れにあるという複雑なものだけに、単的な言葉で知らせるのは、大変に難かしいことではあります。

作品全体の形、一字一字の組立による点と線の構図、線質や線性、濃淡、潤濁の墨色の変化、これらが統合されたものが書で、更に微妙な感情の起伏や心の動きによる、ゆったりした温かさ、またきびしい気分、明るいさわやかさ、ロマンと情味、澄んだ清々しさ、熱情的で強烈な感じなど、さまざまが要求されるものであります。

今回展示されたものは皆十年、二十年以上の書歴を持ち、連日このことから心をこめて書作に励んできた人達の、文字ににじみ出た人がらや心ばえ、趣味とかがうかがわれ、無限のたのしみと共に、喜びあふれる誠に見事な作品ばかりです。

表面的な巧拙の問題だけでなく、其の裏面の努力を高く評価していただければ幸いです。

「芸術の書というものは、文字を媒介として、人の心の深くで美しい統一を表現したもので、書の心棒といえは結局いのちの躍動、つねにところに浮ぶまぼろし、これを形につなぎとめる工夫、これが字かきの学問である。これはやはりおろそかにするわけにはいくまい。」

芸術院会員西川寧先生の言葉です。

綿 引 千 斎

第14回

書の部入賞者

賞 名	題 名	氏 名	住 所
いわき市長賞	陶 淵 明 詩	滝 翠 嶺	
いわき市議会議長賞	溝 口 桂 巖 詩	芳 賀 二 葉	
いわき市教育委員会 教育長賞	揚 衡 詩	吉 田 汀 秀	
(桂 作)			
いわき商工会議所賞 会 頭	稲 香 山 色 壘	神 林 東 伸	
いわき市文化団体 連絡協議会会長賞	文 賦	田 久 芳 涯	
いわきライオンズ クラブ賞	蘇 東 坡 詩	松 崎 秋 香	
福島県報徳社賞	張 説 詩	伊 藤 抱 琴	
〃	蘇 東 坡 詩	長 谷 川 素 碩	
〃	謝 靈 運 詩	川 嶋 石 楠	
株式会社加地和組賞	わ が 道	細 井 研 堂	
株式会社すまい賞	暮 春	斎 藤 柳 史	
有限会社トーカイ賞	静 嬾	春 日 八 虎	
株式会社箱崎美術 広告社	群 書	渡 邊 大 雅	
株式会社松月堂賞	蘇 東 坡 詩	新 妻 沙 園	
魁 文 堂 賞	五 言 絶 句 二 首	大 河 原 一 醉	
〃	王 漁 洋 詩	関 根 溪 石	
遠藤一心堂賞	問 我 師 故 為	門 馬 春 錦	
〃	蘇 東 坡 詩	服 部 桂 山	
〃	五 言 律 詩	斉 藤 王 寧	
〃	五 言 絶 句	鷺 谷 青 障	
〃	裴 迪 詩	河 辺 素 月	
いわき市民美術展覧会 運営委員会賞	金 泥 写 經	蛭 田 秋 月	
〃	実 朝 の 歌 二 首	助 川 空 翠	
〃	杜 甫 詩	山 田 鐵 石	
〃	吳 昌 碩 詩	斉 藤 小 波	
〃	鄧 谷 詩	渡 辺 浩 子	
〃	五 言 句	半 沢 聖 邨	
〃	魏 下 蘭 之 詩	中 村 静 雅	
いわき市書道協会賞	吳 昌 碩 詩	生 田 小 卷	
〃	子 夜 四 時 歌	芦 川 雪 舫	
〃	五 言 排 律	山 縣 一 艸	
〃	黄 遵 憲 の 詩	久 野 花 中	

審査にあたって

15回を迎えた市美展は、内容的にも充実をみせ、いよいよ地に着いた感じを深くする。

審査に当っては、当然のことではあるが市民の展覧会であることを踏まえ、公平にしかも慎重かつ厳正に終始した。

全般的に言えることは、作品づくりがうまくなったということである。全体構成に意を注ぎ、白と黒との調和にも工夫が見られる。それぞれ渾身の努力を傾注した作品も多かった。

作品は多彩にわたるが、作品の優劣の一つは線の練れがどうかにかかってくると思う。創作意欲に燃えることも大事なことではあるが、常に書の原点に立ってしっかりした土台を築き、学び、自らの研鑽により深めていく以外にはないような気がしてならない。

田 久 奇 峰

第15回

書の部入賞者

賞 名	題 名	氏 名	住 所
いわき市長賞	山中 独 居	神 林 東 伸	
いわき市議会議長賞	王 建 詩	吉 田 汀 秀	
いわき市教育委員会 教 育 長 賞	元 好 問 詩	長谷川 素 碩	
(佳 作)			
いわき商工会議所 会 頭 賞	岑 参 詩	芳 賀 二 葉	
いわき市文化団体 連絡協議会会長賞	顔 延 年 詩	川 嶋 石 楠	
いわきライオンズ クラブ賞	漫 題 二 首	伊 藤 抱 琴	
福島県報徳社賞	七 言 律 詩	松 崎 秋 香	
〃	虎 哮 哮	渡 辺 大 雅	
〃	万葉の歌三首	助 川 空 翠	
株式会社すまい賞	吳 昌 碩 詩	生 田 小 卷	
有限会社トーカイ賞	佛 説 阿 弥 陀 經	蛭 田 秋 月	
株式会社箱崎美術 広 告 社 賞	杜 甫 詩	新 妻 涉 園	
魁 文 堂 賞	韓 愈 詩	猪 狩 桂 舟	
〃	七 言 絶 句	斎 藤 柳 史	
〃	七 言 律 詩	服 部 桂 山	
株式会社ヨ一カド一 マルトモ賞 有 限 会 社 平 電 子 印 刷 所 賞	唐 詩 二 首	齊 藤 王 寧	
〃	慶 雲 昌 光	門 馬 春 錦	
〃	王 漁 洋 詩	関 根 溪 石	
〃	独 楽 園 記 一 節	馬 目 香 楊	
遠 藤 一 心 堂 賞	杜 甫 詩	金 賀 香 楓	
〃	五 言 絶 句	芦 川 雪 舫	
〃	七 言 二 句	阿 部 夢 涯	
〃	五 言 絶 句	今 野 秀 鶴	
〃	あ さ 霧	細 井 研 堂	
いわき市民美術展覧会 運 営 委 員 会 賞	清 逸	大河原 一 醉	
〃	七 言 句	小 宮 唐 遷	
〃	竹屋純臆清不俗	磯 上 涛 月	
〃	吳 昌 碩 詩	渡 辺 千 祐	
いわき市書道協会賞	八 言 二 句	齋 藤 泰 山	
〃	吳 昌 碩 詩	山 野 松 崖	
〃	王 鐸 詩	小 口 天 信	
〃	七 言 二 句	半 沢 聖 邨	

審 査 雑 感

本年は公募総数が197点で、昨年より37点の増です。市民による市美展であることが、皆さんに理解認識されてきたその現れと嬉しく思います。この風潮が確かなものとなり底辺の輪がひろがり、いわき市の書の振興が一層計られるよう望んでやみません。

今展をみて、半切たて形式が全体の8割がたをしめ、同じパターンで代り映えしない傾向のあるのは否めませんが、誰でも自由にそして容易に取組め参加できるという本展の眼目を考えると致仕方ないことでしょう。それでも本年度は、12平方尺の枠内でたての長さが8尺まで許され、また本表装による軸物が認められたため、それが少人数ですが出てきて作品の多様化されつつあるのは昨年にならぬ現象です。

本年の傾向として、一般に密度の濃いものが増えてきてます。こうなるとどうしても鍛錬の積重ねがものをいうことになり、簡単に一発主義とはいかなくなります。経験の豊かな人が群をぬく、本回の三賞受賞者がそれを如実に立証していると解します。神林氏の大胆豪放、芳賀氏の軽妙酒脱、芦川氏の清勁雄健が特徴ですが、各々緻密な計算の上に作品づくりがなされ巧みです。以下の入賞者も大なり小なり、その要素が認められます。

今回は書歴の古い人達の受賞が多く上位をしめています、その方々全てが常に秀れた力を発揮しているというところではありません。勉強の仕様で、先輩をいくらでも凌駕できます。こうなると書歴如何は、関係なくなります。毎日を大切に精一杯学習すれば、必ずいい結果を生みます。残念ながら賞を逸した方にかくあらんことを願い、明年度に期待をかけたと思います。

佐々木 折 柴

第16回

書 の 部 入 賞 者

賞 名	題 名	氏 名	住 所
いわき市長賞	駕 奔 車	神 林 東 伸	
いわき市議会議長賞	宋 之 問 詩	芳 賀 二 葉	
いわき市教育委員会 教 育 長 賞	七 言 絶 句	芦 川 雪 舫	
(佳 作)			
いわき商工会議所 会 頭 賞	王 漁 洋 詩	関 根 溪 石	
いわき市文化団体 連 絡 協 議 会 会 長 賞	白 居 易 詩	小 口 天 信	
いわきライオンズ ク ラ イ ブ 賞	王 維 詩	松 崎 秋 香	
福島県報徳社賞	元 好 問 詩	長 谷 川 素 碩	
〃	燭 龍	渡 邊 大 雅	
〃	万 葉 の 歌	助 川 空 翠	
株式会社すまい賞	龍 翔 景 雲	川 嶋 石 楠	
有限会社トーカー賞	己 酉 元 日	今 野 秀 鶴	
株式会社箱崎美術 株 廣 告 社 賞	杜 甫 詩	新 妻 涉 園	
魁 文 堂 賞	白 樂 天 詩	齋 藤 王 寧	
〃	写 經 金 泥 妙 法 蓮 華 經	蛭 田 秋 月	
〃	臨 廻 溪	門 馬 春 錦	
株式会社ヨード一 マ ル ト モ 賞	八 言 二 句	齋 藤 泰 山	
有 限 会 社 平 電 子 印 刷 所 賞	七 言 律 詩	伊 藤 抱 琴	
〃	か す み	細 井 研 堂	
〃	苦 筍 賦	栗 田 嘉 泉	
遠 藤 一 心 堂 賞	間 居 ・ 竹 西 亭	齋 藤 柳 史	
〃	許 渾 詩 四 首	大 山 嶽 鳳	
〃	人 日 贈 宮 正 富	大 河 原 一 醉	
〃	長 恨 歌	生 天 目 豊 州	
〃	王 維 詩	白 土 玉 燕	
いわきビル設備管理 セ ン タ ー 株 式 会 社 賞	蘭 亭 之 詩 之 一 節	阿 部 讚 陽	
常 交 サ ー ビ ス 賞	前 原 梅 窓 詩	服 部 桂 山	
株 式 会 社 賞	吳 昌 碩 詩	坂 本 一 道	
株 式 会 社 日 本 オ イ ラ ー ビ ル サ ー ビ ス 賞	司 宮 図 詩	小 松 玲 香	
いわき市民美術展覧会 運 営 委 員 会 賞	雪 晴 晚 望	小 林 千 恵	
いわき市書道協会賞	七 言 二 句	半 沢 聖 邨	
〃	張 説 詩	関 晃 柳	
〃	七 言 絶 句	河 邊 素 月	
奨 励 賞	小 島 切 節 臨	細 井 清 子	
新 人 賞	愚 庵 ・ 五 言 絶 句	猪 狩 倫 子	

審査にあたりて

今回展は、出品総数 204 点、公募 182 点、昨年度より 7 名の増をみた。若干ではあるが、年毎に増えてゆくことは喜ばしいことである。

総体的にみて、中堅層の一部の作品が力をつけ上昇して来たのが、今回展の特色であった。反面、入賞常連者の中に、いま一つ伸び悩んでいる姿が目についた。栄枯盛衰は世の習いとはいえ、この事態は些かさびしく、まだまだ精進し力作を出して欲しい。

個々の作品評は紙面の都合で割愛させていただくが、大きく目についた二、三を挙げてみたい。折角の技倆を持ちながら、筆が動くのが面白くただわけもなく腕をふりまわし俗調から抜けだせず、技だけが空転して人間不在の作品群。

ただなんとなく筆を持ち、書に対する認識や意志が見受けられず甘い作品群。等々。前者は、「書」とは何か？。厳しく自問自答し、瞳を据えてじっくりととりくんでみたい。

「書」はその人自身の全人格の滲み出てくるものであって、自己の心の底から湧きあがる押えがたいほとばしる精神、それが筆を託して紙に表われるものではないだろうか。

筆をすっと引いた線で見られる書、それは素晴らしい。下手さ加減の字はまだすくわれるが、俗は医やす術（すべ）はないように思われる。もっと素直に内に燃えるものを秘めて、毅然と紙に立ち向う姿勢が望まれよう。

受賞されなかった方々になぐさめの言葉とてないが、来年度に期待し益々努力精進の道を歩んで欲しい。

村上 皓 南

第17回

書の部入賞者

賞 名	題 名	氏 名	住 所
いわき市長賞	送 晋 侯 作	松 崎 秋 香	
いわき市議会議長賞	顔 延 年 詩	川 嶋 石 楠	
いわき市教育委員会 教 育 長 賞	龍 門 無 宿 客	大 河 原 一 醉	
(佳 作)			
いわき商工会議所 会 頭 賞	岑 参 詩	新 妻 涉 園	
いわき市文化団体 連 絡 協 議 会 会 長 賞	李 商 隱 詩	金 賀 香 楓	
いわきライオンズ ク ラ ブ 賞	書 戲	渡 邊 大 雅	
福島県報徳社賞	良 寛 の 歌	助 川 空 翠	
"	奥 の 細 道	細 井 研 堂	
"	春 雲 長 似 帶	門 馬 春 錦	
株式会社すまい賞	呉 昌 碩 詩	高 久 香 扇	
有限会社トーカー賞	七 言 二 句	齋 藤 泰 山	
株式会社箱崎美術 広 告 社 賞	萬 楚 詩 二 首	齋 藤 王 寧	
魁 文 堂 賞	廓 然 無 聖	磯 上 涛 月	
"	人 日 迎 諸 子 分 韵	伊 藤 抱 琴	
"	杜 甫 詩	長 谷 川 素 碩	
株式会社ヨーカー マ ル ト モ 子 賞	王 維 詩	服 部 桂 山	
有限会社平電 印 刷 所 賞	村 情 山 趣 村 忘 機	永 山 閑 遠	
"	行 義 乘 德	江 尻 苔 逕	
"	万 葉 春 の う た	細 井 清 子	
遠藤一心堂賞	七 言 絶 句	芦 川 雪 舫	
"	過 禁 門	斎 藤 柳 史	
"	七 言 律 詩 (吳 俊 卿 の 詩)	久 野 花 中	
"	佛 説 阿 弥 陀 經	蛭 田 秋 月	
"	呉 昌 碩 詩	渡 辺 千 祐	
いわきビル設備管理 センター株式会社賞	七 言 二 句	馬 目 香 楊	
常 交 サ ー ビ ス 株 式 会 社 賞	王 漁 洋 詩	関 根 溪 石	
株式会社日本オイル ビルサービス賞	白 樂 天 詩	山 田 鐵 石	
いわき市民美術展覧会 運 営 委 員 会 賞	頼 山 陽 の 詩	河 辺 素 月	
いわき市書道協会賞	顔 延 年 詩	佐 藤 溪 雲	
"	千 光 寺	今 野 秀 鶴	
"	七 言 句	猪 野 直 之	
"	呉 昌 碩 詩	猪 狩 桂 舟	
奨 励 賞	五 言 絶 句	新 妻 嶺 風	
新 人 賞	五 言 句	谷 津 賢 司	
"	風 殮	春 日 有 子	

審査を終えて

市美展も18回と長い歳月を数える。それだけに練度を踏まえた人達の出陣ということで、作品評や書のあり方など喋々する必要はないと思うが、展覧会への出品作だ、誤字ということには完全の注意が肝要であろう。

上位の顔ぶれが決って面白くないと言う声を聞くことがある。たしかに例年上位の人達は同じかに見える。だがそれは知名度があるからではあるまい。自らたゆまず学び謙譲の心を失わないで精進をつづけているからであり、励みに励んでいる作家の作品は光っていると言える。

たまたま読んだ、佐藤佐太郎著「短歌を味わうところ」の中に、私の書に対するところの一つを表現した好文があったので、少し長い引用させて頂く。が、これは一つのあり方と言うだけで、押しつけるつもりはない。

あるとき「書源」という雑誌に、書家の小坂奇石氏が「瓦を以て注とすれば巧なり、鉤を以て注とすればはばかる。黄金を以て注とすれば殫す。その巧は一なり、而しておしむ所有れば則ち外重んず。凡そ外重きものは内拙し」という荘子の一節を引いて一文を書いておられるのを読んだ。「注」というのは賭博のかけものので、瓦をかけて弓を引くと平気でやるからうまく中するが、少し値うちのある帯止めを賭けると気になるし、黄金を賭けるといよいよ緊張して平気でないからあたらない。その技術は同じだが、外重んずると内は拙くなる、と荘子は言っている。「良い字を書こうと思うと却って腕が硬くなり、見ばえのしない作品になりやすい。そこで平生周到に研究練磨し、その上で本番のときこそ虚心平気でありたいものである。」と小坂氏は言っている。

これは書にかぎらず、スポーツの世界でもみなそうだが、大事な本番のとき十分に力が発揮できない例が多い。「歌は瞬間的にきまる勝負とは別だが、それでも気負ってかたくなってはやはりいけない。そんなことは十分知っている筈なのに、作歌四十年を越えた自分が実行出来ないとは情けないではないか。」と第一級の歌人、故、佐藤佐太郎先生は言っている。いわき市常磐湯本の山小屋で書いた一文である。

綿 引 千 斎

第18回

書の部入賞者

賞 名	題 名	氏 名	住 所
いわき市長賞	澹 然	渡 邊 大 雅	
いわき市議会議長賞	山 下 晚 晴	斎 藤 柳 史	
いわき市教育委員会 教育長賞	梅 堯 臣 詩	長谷川 素 碩	
(佳 作)			
いわき商工会議所 会 頭 賞	黄 道 周 詩	松 崎 秋 香	
いわき市文化団体 連絡協議会会長賞	西 行 の 歌	細 井 研 堂	
いわきライオンズ クラブ賞	聖 果 寺	川 嶋 石 楠	
福島県報徳社賞	吳 偉 業 詩	服 部 桂 山	
"	老子道德經一節	江 尻 苔 逢	
"	夕 嵐 無 処 所	門 馬 春 錦	
"	大 空 に	助 川 空 翠	
株式会社すまい賞	金 泥 写 経	蛭 田 秋 月	
有限会社トーカー賞	江 上 吟	伊 藤 抱 琴	
株式会社箱崎美術 広告社賞	貴 山 谷 詩	関 根 溪 石	
魁 文 堂 賞	蘭 亭 詩	斎 藤 泰 山	
"	商 山 孤 館 書 生	今 野 秀 鶴	
"	韓 愈 詩	生 天 目 豊 州	
株式会社ヨード一 マルトモ電子賞 有限会社平電 印刷所賞	元 好 問 詩	金 賀 香 楓	
"	杜 甫 詩	新 妻 涉 園	
"	吳 昌 碩 詩	猪 狩 桂 舟	
"	友 人 送	河 邊 素 月	
遠 藤 一 心 堂 賞	春 燕 飛	大 河 原 一 醉	
"	十 言 二 句	馬 目 香 楊	
"	五 言 二 句	芦 川 雪 紡	
"	王 維 詩	本 間 景 石	
"	錢 起 詩	小 林 千 惠	
いわきビル設備管理 センター株式会社賞 常交サービス 株式会社賞 株式会社日本オイル ビルサービス賞	老 桂 斎 藤 王 寧	高 久 香 扇	
いわき市書道協会賞	良 寛 詩	台 椒 花	
"	王 漁 洋 詩	山 田 鐵 石	
"	林 和 靖 詩	國 井 翠 鳳	
"	六 言 二 句	及 川 峰 紘	
"	吳 昌 碩 詩	鈴 木 芳 梢	
奨 励 賞	趙 乘 文 詩	粟 野 秀 峯	
新 人 賞	江 樓 伊 藤 光 一	植 田 千 美	
"	觀 水 通 禪 意		

審査を終えて

本展も19回を重ね、年々市民の美術展として親しみや関心がよせられていることは、まことに喜ばしいことであります。

本年度の搬入総数は221点で、応募作品は前回より17点増えました。そんな中で、かなの出品者が最近増加しつつあることは、本展発展にも大へん嬉しいことです。

審査にあたっては、十分に時間をかけ慎重を期しました。結果は35点の入賞となりました。

出品作は、それぞれ力一ぱいの努力がうかがわれ、総体的にレベルも向上し力量も伯仲しています。

時に入賞作は、ひたむきな情熱と努力作品が多く、作者の意気込みが感じられました。

しかしながら、数の中には書き込み不足というか、技術が先行して表現力に欠けるもの、構成のアンバランスから新鮮味にもう一つ、といったものもありました。

この際、多くの作品をみつめ、線質、結体、章法、墨量、構成等の基本的なことに目を向け、あせらず研鑽されるよう望みます。

「書は人なり」とよくいわれます。実力は人からはいただけません。自分の書が光るか光らないかは、その人の日頃の磨き方にかかっています。どうか自分の感性によって主体性のある作品づくりに意欲を燃やし、根気強く、そしてあくまでも継続していただきたいと思ひます。

今回の出品が、自分にとって大きな収穫でありますよう祈ります。

審査員長 田久奇峰

第19回

書の部入賞者

賞名	作品名	作家名	住 所
いわき市長賞	早 歸	芦川雪舫	
いわき市議会議長賞	群 鳳	渡邊大雅	
いわき市教育委員会 教育長賞	梅 堯 臣 詩	長谷川素碩	
《佳 作》			
いわき商工会議所 会 頭 賞	吳 昌 碩 詩	高久香扇	
いわき市文化団体 連絡協議会会長賞	嵯峨天皇詩二首	服部桂山	
いわきライオンズ クラブ賞	春 日	伊藤抱琴	
福島県報徳社賞	李 白 詩	金賀香楓	
〃	西 行 の 歌	細井研堂	
〃	七 言 律 詩	鈴木花泉	
〃	黄 山 谷 詩	関根溪石	
株式会社すまい賞	陳 道 復 詩	松崎秋香	
有限会社トーカイ賞	十 言 二 句	馬目香楊	
株式会社箱崎美術 広告社賞	贈 盧 綸	斎藤柳史	
魁文堂賞	吳 昌 碩 詩	猪狩桂舟	
〃	鶴 舞	大河原一醉	
〃	杜 甫 詩	新妻涉園	
株式会社ヨード一賞 マールトモ電子賞 有限会社平電所 印刷所賞	省 中 對 雪 寄	河邊素月	
〃	松 搖 風 裏 声	永山閑遠	
〃	七 言 詩 二 首	斎藤王寧	
〃	吳 昌 碩 詩	渡邊千祐	
遠藤一心堂賞	七 言 二 句	台 椒 花	
〃	妙 法 蓮 華 經	蛭田秋月	
〃	中 公 伏 地 再 拜	門馬春錦	
〃	万 葉 の 歌	細井清子	
〃	白 樂 天 詩	山田鐵石	
いわきビル設備管理 センター株式会社賞	吳 昌 碩 詩	園部翠香	
常交サービス賞 株式会社賞	和晋陵丞早春遊望	池田青松	
株式会社日本オイラー ビルサービス賞	胸 中 之 丘 壑	齋藤泰山	
いわき市書道協会賞	万 葉 の 歌	助川空翠	
〃	春 望	及川峰紘	
〃	良 寛 詩	小林千恵	
〃	王 漁 洋 詩 二 首	生天目豊州	
奨 励 賞	周 萃 亭 句	金野香園	
新 人 賞	唐 詩 二 首	谷津彤雲	
〃	吳 昌 碩 詩	箱崎香峰	

審査を終えて — 善書願望 —

本展の作品を審査してみて、確かに皆さんの書がうまくなりました。以前から比較して格段の差を感じます。

うまさを極めるのは当然で、とことんまで技を磨く必要があります。ただこのうまさが油断のならないものなのです。うまさがイコールいい書に連がるかと申せば、そうではありません。手先の器用だけに頼って、技巧のみにとらわれてしまうと、えてして習気といいますか、俗癖に落ちる弊害が生じます。これこそ注意しなければならぬ問題です。

どうすれば、それが打開できるでしょうか。眼を肥やすことです。そこから美を識別できる能力がつかめ、善悪の判断もつき俗格に落ちることもなく、技とのバランスも計られます。

二、三の例として、展覧会を見ること（書に限らずあらゆる分野の作品）、書物を読むこと、それに日常の万般に眼を向けることなど、身边には好材料がいくらでもあります。この一つでもいいですから、億劫がらずに実行することです。先師である西川寧先生が、日々新聞の文化欄を読むだけでも、ものをみる眼が培われていくと常々言われていたことを思い出されます。

技芸は苛酷なもので、容赦はありません。結局は自分が自分をよくも悪くもしますから、平素の書へ立向う姿勢が大切です。いい書をいかに作るか、これこそ自身に課せられた大きな目途として、精進されることを願います。

審査員長 佐々木 折 柴

第20回

書の部入賞者

賞 名	作 品 名	作 家	住 所
《一般の部》			
いわき市長賞	傳 山 詩	松崎秋香	明治団地8-1
いわき市議会議長賞	登 浮 碧 樓	斎藤王寧	中之作字勝見ヶ浦1-85
いわき市教育委員会 教 育 長 賞	秉 彝 彝	渡辺大雅	中岡町一丁目3-13
《佳 作》			
いわき商工会議所 会 頭 賞	呉 昌 碩 詩	高久香扇	永崎字館73-8
いわき市文化団体 連絡協議会会長賞	六 言 二 句	門馬春錦	平字道匠小路35-1

賞 名	作 品 名	作 家 名	住 所
いわきライオンズ クラブ賞	蘇 東 坡 詩	関根溪石	
福島県報徳社賞	大 孟 鼎 の 一 節	江尻苔逢	
〃	出 清 遠 狹 野 望	伊藤抱琴	
〃	杜 甫 詩	金賀香楓	
〃	呉 昌 碩 詩	猪狩桂舟	
株式会社すまい賞	出 清 遠 狹 野 望	齋藤柳史	
有限会社トーカイ賞	白 樂 天 詩	高野 晶	
株式会社箱崎美術 社 告 社 賞	十 言 二 句	斎藤泰山	
魁 文 堂 賞	暮 景	芦川雪舫	
〃	し ら つ ゆ	細井研堂	
〃	呉 昌 碩 詩	坂本一道	
株式会社ヨトモ マール印刷所	賈 至 詩 二 首	小林千恵	
〃	舟 次 鐔 津	河辺素月	
〃	杜 甫 詩	鈴木馨水	
〃	蝶 傭 飛	大河原一醉	
遠藤一心堂賞	十 言 二 句	馬目香楊	
〃	百人一首より七首	細井清子	
〃	六 言 二 句	飛田疎竹	
〃	劉 長 卿 詩	斎藤枝雪	
〃	丙 午 除 夕	及川峰紘	
いわきビル設備管理 センター株式会社賞	蘇 東 坡 詩 四 首	生天目豊州	
常交サービス 株式会 社 賞	呉 昌 碩 詩	渡辺千祐	
株式会社日本オイラー ビルサービス賞	晚 泊 揚 子 江 述 懷	池田青松	
いわき市書道協会賞	金 泥 佛 説 阿 弥 陀 經	蛭田秋月	
〃	春 日 大 風 感 懷	猪野直之	
〃	万 葉 の 歌	助川空翠	
〃	呉 偉 業 詩	服部桂山	
奨 励 賞	幽 香 入 茶 竈	樋口敦美	
〃	呉 昌 碩 詩	新妻心葉	
〃	呉 激 詩 二 首	粟花琴雪	
〃	白 樂 天 詩	大谷蒼石	
〃	梅 堯 臣 詩	庄司溪泉	
〃	五 言 句	松本大涛	
〃	呉 昌 碩 詩	四家彩華	
《青年の部》			
新 人 賞	呉 昌 碩 詩	箱崎香峰	
〃	春 江 送 別	谷津彤雲	
〃	阮 嗣 宗 詩	大谷彩華	
〃	露 結 為 霜	猪狩抱壺	